



読まなごころこに!

「お薬のカタチに悩む担当医」

ドクターXの酔いどれ放言

〈某日、職場にて〉

「先生、飲み会はまだキビシイですかねえ……。」

「まだ新型「コロナ」も収束には程遠いし、僕ら医療関係者は慎重を期したほうがいいよねえ」

「うーん、残念ですが致し方ありません。」

〈院内の会議室にて缶「コーヒー」で乾杯〉

「唐突やけど君「サイケイ」って気にしたことある?」

「定期預金とかですか?」

「いや、その「財形」じゃなくて薬の話で。錠剤もあれば粉薬もあればシロップもあるよね? 薬のさまざまな力タチのことを「剤形」って言うんよ」

「そうなんですか。私自身は錠剤とカプセルくらいしか飲んだことがないです。薬って表面が甘いからつい舐めて味わってしまいがちですわ。」

「それは糖衣錠やね。中身が苦いクスリを飲みやすくするため糖で包んである」

「ずつと舐めてたら、猛烈な苦さに悶絶した記憶がよみがえってきました。」

「アリナミンなんか中身はすごく苦いから、舐めたらアカンよ(笑)。ちなみに水無しで飲める崩壊剤なんかも登場してるし、飲み薬以外にも貼り薬に塗り薬、座薬、注射というあるよね」

「そんなに種類が必要なんでしょうか。錠剤さえあればいいようにも思いますけど……。」

「それは君が、まだ若くて健康から言えるんや。歳を取ったり、飲む薬が多くなったりすると、薬を飲むこと自体がづらい患者さんも出てくる」

「そういえば私も昔、帯状疱疹が出たときは、1日5回も薬を飲まないといけなくて、ちよつとタイヘンでした。」

「帯状疱疹も今では、1日1回で済む新しい内服薬が出てくるけどね。飲む回数が5回から1回に減ったら楽なんだろう?」

「それは思います。飲み忘れて1日3〜4回しか服用してない日もありましたし。」

「君の場合は少々飲み忘れても大丈夫だったかもしれないけど、患者さんによっては症状が悪化する可能性があるからね。飲み忘れたことで患者さんが自分を責めて、気分の落ち込みを招くこともある」

「それは由々しき問題ですね……。」

「だからこそ、できるだけ飲み忘れが無くなるように、あるいは無理なく飲めるように、患者さん側だけではなく、我々医療サイドも工夫していくことが大切なんよ」

「なるほど、よく分かります。」

「同じ薬であっても、カプセルからゆっくり溶け出したり、組成の改良で代謝速度を遅らせたりすることで、薬効が長く持続する新製品も登場してる」

「効果が長く続けば、飲む回数が少なくて済みますね。」

「それを貼り薬にしたり、注射にしたりすれば、薬を「飲む」必要をなくすることもできる。ただ、飲むことで安心するという患者さんには、1日に何錠も飲む薬をあえて処方したりもするけどね(笑)」

「個人的には」

注射は苦手ですが、そうやって選択肢が広がるのはいいですね。

「注射に抵抗が強い人には飲み薬や貼り薬を選ぶ、飲み薬を忘れがちな人には貼り薬や注射を選ぶという風に、それぞれの患者さんのニーズや特性、ライフスタイルなどを考慮したオーダーメイド処方が大切だと思うよ」

「患者さんも先生と相談のうえ、より自分に合ったカタチの薬を選ぶようになるといいなと感じました。お話、ありがとございました!」



(当院匿名精神科医Xべるぶネオ編集部)